

農林水産省登録  
第 24041号

明日の  
農業を  
考える



写真はいメージです

幅広く使える常備薬

# Zボルト

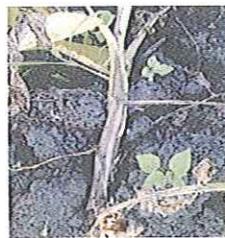
殺菌剤〈銅水和剤〉

## ゼット

- 多くの作物、病害に適用があります。  
野菜類に登録があり軟腐病など有効薬剤が少ない細菌性病害にも優れた予防効果を発揮します。
- 適用の作物に薬害が少なく、使いやすい銅殺菌剤です。  
薬害軽減のため亜鉛とマグネシウムを配合した処方のため、無機銅剤の中でも薬害リスクを低減しています。
- 日本農林規格(JAS)の有機農産物栽培でも使用できます。



軟腐病(キャベツ)



軟腐病(ぼれいしょ)



斑点細菌病(レタス)



日本農林規格(JAS)の有機農産物栽培でも使用できます

**適用病害虫および使用方法**

（2020年1月現在の登録内容）

作物名	適用病害虫名	希釈倍数 又は使用量	使用 液量	使用時期	本剤の 使用回数	使用方法	銅を含む 農薬の 総使用回数
麦類		種子重量の1%	—	は種前		湿粉衣	
大麦 採種用小麦	黒節病	500倍	60～ 150ℓ /10a				
かんきつ	そうか病	400～500倍	200～ 700ℓ /10a	—			
	黄斑病	600倍					
	かいよう病	500～1000倍					
りんご	すす点病、すす斑病	500倍		休眠期 収穫後～ 開花前まで 休眠期			
すもも	黒斑病						
もも	せん孔細菌病						
ネクタリン							
ぶどう	べと病、さび病、 褐斑病	500～800倍		—			
	つる割細菌病	800倍					
おうとう	せん孔病						
うめ	かいよう病	500倍		葉芽発芽前 まで			
びわ	がんしゅ病			—			
いちじく	疫病	1000倍					
キウイフルーツ	花腐細菌病				※1		
かんしょ	斑点病、基腐病	500倍				散布	
ぼれいしょ	軟腐病	400倍					
	疫病						
やまのいも	葉炭病、炭疽病						
だいず	紫斑病、斑点細菌病、 葉焼病	500倍					
あずき	褐斑細菌病						
いんげんまめ	かさ枯病						
さやえんどう 実えんどう	先端黄白化症	1000倍					
そらまめ 未成熟そらまめ	赤色斑点病	500倍					
すいか	疫病	500～800倍	100～ 300ℓ /10a				
トマト ミニトマト	疫病、輪紋病	400～600倍					
なす	すすかび病						
だいこん	白さび病	500倍					
にんにく	春腐病、さび病、 白斑葉枯病						
にら	株腐細菌病、 白斑葉枯病						
にんじん	黒葉枯病						
レタス 非結球レタス	腐敗病	500～800倍					
パセリ	軟腐病	800倍					
ブロccoli	花蕾腐敗病	500倍					
アスパラガス	斑点病、茎枯病	8倍	8ℓ/10a			※2	
にがうり	うどんこ病						
かぼちゃ	果実斑点細菌病	500倍	100～ 300ℓ /10a				
ズッキーニ	軟腐細菌病						
くわい	ひぶくれ病						
さんしょう(果実)	さび病	1000倍	200～ 700ℓ /10a				
さんしょう(葉)							
野菜類	斑点細菌病、 褐斑細菌病、 黒腐病、軟腐病、 べと病、黒斑細菌病	500倍	100～ 300ℓ /10a				
	こんやく	葉枯病、腐敗病					
てんさい	褐斑病	400倍					
茶	炭疽病	500倍	200～ 400ℓ /10a	摘採7日前 まで			
	赤焼病	500倍					
	もち病、網もち病	400～500倍					
りんどう	葉枯病	500倍	100～ 300ℓ /10a				
つつじ類	もち病						
樹木類	斑点症 (シュドサーコスボラ菌)	800倍	100～ 700ℓ /10a	発病初期			
	輪紋葉枯病	500倍					

作物名	適用場所	適用 病害虫名	使用 量	使用 液量	使用 時期	本剤の 使用 回数	使用 方法	銅を含む 農薬の 総使用回数
なす	温室、ガラス 室、ビニール ハウス等	すすかび病	588g /10a	10ℓ /10a	—	—	常温 燻霧	—
きゅうり	密閉できる 場所	べと病						

**使用上の注意事項**

- 本剤の所要量を所定量の水にうすめ、よくかきまぜてから散布する。
- 石灰硫黄合剤等アルカリ性薬剤との混用はさける。
- くわいを使用する場合は、散布後少なくとも7日間は落水、かけ流しはしない。
- 小麦の生育期に使用する場合は、葉に薬着を生じ、生育に影響を及ぼすおそれがあるため、採種用途以外では使用しない。
- かんきつに使用する場合は、薬着（スターメノウズ）を生じるおそれがあるため、炭酸カルシウム水和剤を加用する。特に果実の着生時期及び採種への散布では厳守する。
- りんごに使用する場合は、薬着を生じるおそれがあるため必ず炭酸カルシウム水和剤を加用する。
- ぶどうに使用する場合は、次の事項に注意する。
  - ①生育期散布の場合、薬着を生じるおそれがあるため留意し、過度の運用はさける。②後期（果実肥大期以降）の散布では、果房の汚れを生じるおそれがあるため、無袋栽培ではこの時期以降（収穫まで）は使用しない。③巨峰系（巨峰、ピオーネ等）に対しては、葉および果実に薬着を生じるおそれがあるため袋かけ前には使用しない。④新梢、葉に対する薬着軽減のため、銅に弱い品種や薬着の出やすい時期に使用する場合は、必ず炭酸カルシウム水和剤を加用する。⑤褐斑病に対しては、多発時には効果が不十分な場合があるため、なるべく発生初期にべと病、さび病との同時防除に使用する。
- ウリ科作物（きゅうり、メロン、すいか、かぼちゃなど）に対して薬着を生じやすいので、次の事項に十分注意する。
  - ①幼果期には特に薬着を生じやすいので、生育中期以降に散布する。②高温時の散布は薬着を生じやすく、また、症状が激しくなることがあるので、さける。③運用すると葉の周辺部が黄化や硬化を生じるおそれがあるため、過度の運用をさける。④炭酸カルシウム水和剤の所定量は薬着の軽減に有効であるが、収穫間際は果実に汚れをおこすので留意する。
- だいこんに使用する場合は、次の事項に注意する。
  - ①幼果期の散布又は過度の運用は、薬着を生じるおそれがあるためさける。②薬着を生じるおそれがあるため、薬着軽減のために必ず炭酸カルシウム水和剤を加用する。ただし、収穫間際は汚れを生じるので留意する。③病害発生後の散布では効果が劣るので、発生前から予防的に散布する。
- キャベツ、はくさいおよびレタス等の結球作物を対象に使用する場合は、結球期以降の散布は薬着を生じるおそれがあるため、結球初期までに散布する。
- レタスに使用する場合は、次の事項に注意する。
  - ①幼果期の散布又は過度の運用は、薬着を生じるおそれがあるためさける。②非結球レタスに使用する場合は、収穫間際の散布は薬着を生じるおそれがあるためさける。③病害発生後の散布では効果が劣るので、発生前から予防的に散布する。
- ブロッコリーおよびカリフラワーに使用する場合は、花蕾形成期以降の散布は花蕾に薬着を生じるおそれがあるため、花蕾形成期までに散布する。
- こんにやくに使用する場合は、日中高温時の散布は薬着を生じるおそれがあるため、朝夕の涼しい時に散布する。
- いちじくに使用する場合は、次の事項に注意する。
  - ①日照不足、多雨などの気象条件では薬着を生じるおそれがあるため、使用をさける。また、過度の運用は薬着を助長するのでさける。②果実に対して薬着を生じるおそれがあるため、薬着軽減のために必ず炭酸カルシウム水和剤を加用する。ただし、収穫間際は汚れを生じるので留意する。
- ほうれんそうに使用する場合は、次の事項に注意する。
  - ①べと病防除に使用する場合は、発病後の散布は十分な効果がみられないので発生前から予防的に散布する。②収穫間際の散布は葉の汚れを生じるのでさける。なお、雨除け栽培の場合には、収穫までの期間を十分にとる。
- にがうり、パセリ、にら、なすに使用する場合は、汚れを生じるおそれがあるため、収穫間際の散布はさける。
- キウイフルーツに使用する場合は、使用時期が遅くなることと薬着を生じるおそれがあるため、使用時期を厳守するとともに発芽期以降は炭酸カルシウム水和剤を加用する。
- つつじ類に使用する場合は、次の事項に注意する。
  - ①病害発生後の散布では効果が劣るので、新葉展開直前又は展開直後から数回散布する。②前年の多発枝は開花後なるべく早く切除して使用する。③ヒトド系については花蕾期の散布は花弁が白化することがあるので注意する。
- いんげんまめに使用する場合は、幼果期の散布又は過度の運用は薬着を生じるおそれがあるためさける。
- りんどうに使用する場合は、葉に汚れを生じるおそれがあるため、収穫間際の散布はさける。
- やまのいもに使用する場合は、高温時の散布は、薬着を生じるおそれがあるためさける。
- ごぼうに使用する場合は、茎葉にクロノスが生じるおそれがあるため、葉ごと散布する場合は注意する。
- おうとうに使用する場合は、果実に汚れを生じるので、着色期～収穫までは使用しない。
- アスパラガスの無人航空機による使用の場合、運用散布すると薬着を生じるおそれがあるため3回以上の散布はさける。
- かぶに使用する場合は、薬着を生じるおそれがあるため、薬着軽減のために必ず炭酸カルシウム水和剤を加用する。ただし、収穫間際は汚れを生じるので留意する。
- ハウス等の常温燻霧機として使用する場合は特に次の事項に注意する。
  - ①専用の常温燻霧機により所定の方法で燻霧する。特に常温燻霧装置の選定及び使用にあたっては、病害虫防除等関係機関の指導を受ける。②作業はできるだけ夕刻を行い、作業終了後6時間以上密閉しておく。できれば翌朝までそのままとし、開放後十分換気して入室する。③燻霧が直接植物体に当たると葉や果実に汚れを生じるので、果実に燻霧が直接当たらないよう措置をとる。
  - ④無人航空機による使用の場合、散布装置の飛散によって自動車やカーポートの塗装等に薬着を生じるおそれがあるため、散布区域内の諸物件に十分留意する。
- 適用作物群に属する作物又はその新品種に本剤を初めて使用する場合は、使用者の責任において事前に薬着や作物への汚れの有無を十分確認してから使用する。
- 眼に対して刺激性があるので眼に入らないよう注意する。眼に入った場合には直ちに水洗し、眼科医の手当を受ける。使用後は洗眼する。
- 種子消毒の際は不浸透性手袋などを着用する。
- 常温燻霧中はハウス内へ入らない。また、常温燻霧終了後はハウスを開放し、十分換気した後に入室する。
- 街路、公園等て使用する場合は、散布中及び散布後（少なくとも散布当日）に小児や散布に関係のない者が散布区域に立ち入らないよう縄囲いや立て札を立てるなど配慮し、人畜等に被害を及ぼさないよう注意を払う。
- 水産動植物（魚類）に影響を及ぼすので、養殖池等周辺での使用はさける。
- 水産動植物（甲殻類、藻類）に影響を及ぼすので、河川、養殖池等に飛散、流入しないよう注意して使用する。
- 散布後は水管理に注意する。
- 無人航空機による散布で使用する場合は、飛散しないよう特に注意する。
- 散布器具及び容器の洗浄水は、河川等に流さない。また、空袋等は水産動植物に影響を与えないよう適切に処理する。

●使用前にはラベルをよく読んでください。●ラベルの記載以外には使用しないでください。●本剤は小児の手の届く所には置かないでください。

※1 休眠期～養生期（新梢長約10cmまで） ※2 無人航空機による散布

レイミーの農業チャットルーム

ホームページに遊びにきてね!



日本農薬株式会社

東京都中央区京橋1丁目19番8号

カスタマーサービス TEL. 03-6361-1414

ホームページアドレス https://www.nichino.co.jp/

2020年1月作成版(SK)A012001S